

木村文助研究

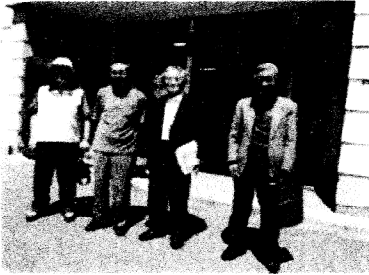
通信 28号 二〇一三・一一・七

北秋田市から資料館へ

七月、北秋田市の佐藤喜美男氏（市老人クラブ連合会長）、米澤一氏（市会議員）が郷土資料館（木村文助コーナー）を訪れ、展示を閲覧し資料の解説を聞きとった。知人の小田切幸一も同行した。米澤氏は一昨年に続いて二度目の来訪である。持参した資料も活用し合川公民館では文化祭に「木村文助コーナー」の展示会を開いている。

木村先生は落合村で生まれ、村は合併により合川町、そして北秋田市となった縁だ。

訪問を終え次の調査地へ向かった。後日両氏から礼状が届いた。北秋田市でも話題が広がりつつあり、北斗市とのつながりを深めたいとの願いも記されていた。（木下）



向かって左から・米澤氏、木下、佐藤氏、小田切氏

〇一三年

五・二 「木村文助研究」通信27号発行。同拡大版を公民館へ展示

七・三 北斗市教育広報「きらめき」No.29に綴り方「父の足」高2高田うめ、自由画「風景」高2白坂喜美男、載る。

七・一三 北秋田市から佐藤喜美男氏、米澤一氏が北斗市郷土資料館を訪れる。（赤い鳥・木村文助コーナー常設展へ調査研究）

七・二三 「北秋田から佐藤さんら訪問 木村文助の功績学ぶ」・函館新聞

八・一 文保研8月例会で前記の件報告

一一・二〇三 北斗市民大野地区文化祭、郷土資料館「赤い鳥・木村文助コーナー」へ多数茶室閲覧

九・「北秋田市名誉市民 畠山義郎お別れ会」資料届く

畠山氏は「村の綴り方―木村文助の生涯」を著し多数の本を文保研へ寄せられた。

昭和から平成に掛け村長・町長を十一期も務めた方だ。以前から交流が有った。郷土資料館コーナーへ資料・著書を展示中。



木下会長(右)の説明を聞く佐藤さん(左奥)と米澤さん(左中央)



北秋田から佐藤さんら訪問

木村文助の功績学ぶ

木下さん展示資料解説

【北斗】大正期から昭和初期にかけて大野尋常高等小学校(現大野小学校)の校長を務め、つづり方指導で名声を築いた木村文助(1882〜1953年)について学ぼうと、北秋田市から米代川水系縄文遺跡研究会会長の佐藤喜美男さん(78)と同市議の米澤一さん(72)がこのほど、郷土資料館(本町)を訪れ、

木村の常設展示コーナーを見学した。

木村は秋田県落合村(現北秋田市)生まれ。大野小学校長時代には、つづり方指導に力を注ぎ、多数の教え子の作品が児童月刊雑誌「赤い鳥」に掲載された。佐藤さんらは函館市内の垣ノ島遺跡に向う途中に資料館を訪問。大野文化財保護研究会の木下寿実夫会長

の解説を聞きながら展示資料を見た。木下会長は木村の功績のほか、常設展示を作り上げるまでの過程などを説明。佐藤さんは「とても勉強になった。出生地以外の場所ですりゃだけの資料が残され、素晴らしい」と感想。木下会長は「功績を残していくことが大事。木村文助を通じてゆかりの地がつかってほしい」と話していた。

(鈴木 潤)

連載 『赤い鳥』に載った郷土の作文

大正から昭和の初め、童話作家の鈴木三重吉が発刊した児童文芸誌『赤い鳥』に掲載された大野小児童の作品を紹介します。大野小は当時、木村文助校長が子どもたちの綴方(つづかた)や絵を投稿し次々と入選。「日本一の綴方学校」と言われました。

父の足

大野小高二 高田うめ

一週間ばかり前に、父が函館へ青物を売りに行って、帰りがあまりおそいので、家で皆待っていたが来ないので兄たちは明日行く支度にかかった。

少したつと、馬小屋の中で、残して行った子馬の呼ぶ声が残る。今度はきつと来たな、と思つて見ていたら、家の馬車であつた。子馬は一生懸命に呼んでい

た。馬車は家の前まで来たので、姉が家から出て行った。私は御飯の支度をし、湯をわかしていたら、外で姉の呼ぶ声があるので行つて見たら、父の足から黒い血がどろどろ流れて、顔を青くして車の上にすわっている。私は急に寒くなったような気がした。

姉が「早く兄(あに)ちゃん(に)いちゃん(を)、呼んで来い」というので、畑に走っていった。兄は、きう

り(きゆうり)畑にいて、きうりをもいでいた。私は「兄ちゃん(を)、早く来てくれど(おくれよ)」といったら、兄はびっくりしたように「何した？」といつて来た。父の足のことを知らせたら、心配そうに「車にでも上がられだべが(ひかれてしまったのか)、どうしたんだべ」といいながら、車のかつぼう(かじぼう)を下していた。

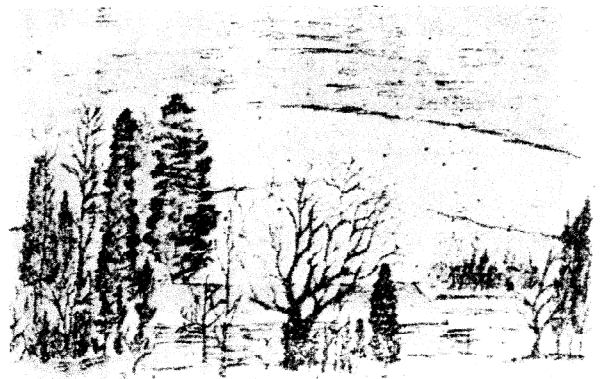
兄はちよつとほんやりして見ていたが、父に「どうしたんだ」といいたら、父は何といつてよ

いかわからないようにしてあつた(いた)が、頭をかしげて「何もがにも(かにも)、車に上がられて困つてしまった」といった。兄は心配そうにして、車の物を下した。父が家にはいる時石を三つ拾つて、それを炬(たき)に焼いて、私に「こさ(へ)、うんと火たいて湯わかせ」とい

った。私は「その石何するの」と聞くと、「石が(石蒸かし)するのだ」といった。それから父にぜん(膳)を出すよ(飯も何も食てぐねども(食いたくないけれど))といつて、さつと一ぜんより(しか)食べません。その内に兄たちが来て、父の怪我したことを聞いた。父はその時、少しの間は黙っていたが「今川越えてからあんまり道に穴があるしけ(あるから)、こさ(そこへ)敷くべと思つて途中から板きれ拾つて来て敷くね(敷くの)に馬車は立たせて置いたら、馬糞(うん)うるせあがつて(うるさくて)、さつさと来てしまつたんだね。馬車の後から前の方さ、つかまつて乗るべと思つたきや(たらば)、車穴(に)片一方の足落して取る気になつていだ内ね、車渡つてしまつて、それでも車き(に)つかまつて乗る気ねなつてい

だきや(いたら)、又別の足落としてひかれた。それでも馬車(に)、乗つてしまつた。」といつて、父はおかしくなつたのか笑つていた。兄たちは心配そうにして、外の方に出ていった。父は焼いた石を湯の中に入れてそのゆげで足をふかして(むして)いた。夕方になつて父は便所に行きたくなつたと見えて、杖をついて、ようやく便所まで行った。

(大正十五年一月号)



風景

大野小高二 白坂 喜美男 (昭和2年8月号)

たりするところなどは、われわれには特に面白いし、石を火で熱して、それを湯の中へ入れて、その湯気で打身(うちみ)のところをむしたりする手療法(ていりぽう)もいかにも地方的な素朴味(すぼくみ)があります。実写の上では、お父さんが家へはいつて、「こさ、うんと火たいて湯わかせ」といわれるところや、「今川こえてから、あんまり道に穴あるしけ」から以下、足をふまれるいきさつを話される對話のところが、おのおの言葉の声色(しんせき)までがまざまざと浮かびますし、わだちに引かれた過程も目に見えるようです。表出もすべて純朴で、いい気持です。

綴方選評

鈴木三重吉

高田さんの「父の足」は、村落的生活相の抽出として興味のあつた作です。

家の馬車がかえると、厩(うまや)に残された子馬が、一生けんめいお母さん馬をよびたて

自由画選評

山本 鼎

白坂喜美男君の「風景」(推奨次席)、描きなれない筆致(ひしじ)のなない描写が推奨次席(すいしょうじ)らしい。中央の枯木がいい。

(編集、社会教育課 京谷 亨)

《北斗市郷土資料館内》

北斗市郷土資料館 (旧大野町郷土資料室)

041-1201

北海道北斗市本町2丁目12番7号

TEL (0138) 77-6681

閲覧 9:00~16:00

休館 毎月第一月曜、年末・年始、臨時

「林芙美子作短編小説に引用」、
「ラジオ放送に引用」、
「北海道教育史に掲載」、
「短編小説的と評価された」など多数の綴り方を収蔵!

『1920年代(大正から昭和初期)の田舎の生活・文化がリアルに表現・・・都会の先生が読むと子どもたちは声も出なかったという』



生活綴り方のふるさとを訪ねてみよう!

(「赤い鳥」復刻版全巻、木村文助編著書、写真など多数)

○函館方面→車で、国道227号を通り大野市街地へ入る

○道北方面→車で、国道5号の大沼トンネルを抜け、10分ほどして大野方向へ右折し、更に市街地へ進み5分で着く

発行・大野文化財保護研究会

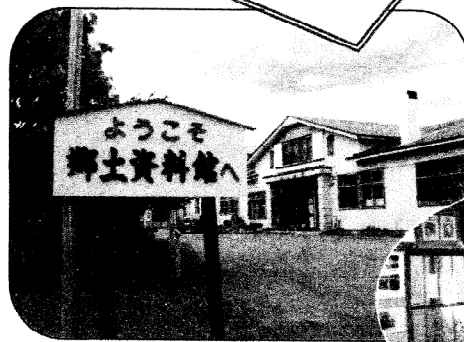
(略称:文保研・ぶんぼけん)

会長:木下寿実夫

○四一―一二〇一

北斗市本町3丁目11番32号

(0138) 77・8535



大野地区市街地の**大野小学校**校門を入り右側木造の建物